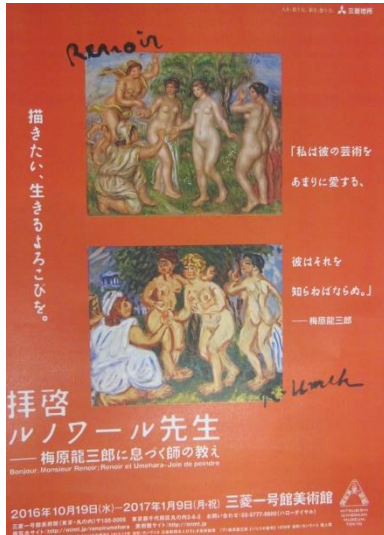


## 拝啓 ルノアール先生 —梅原龍三郎に息づく師の教え

三菱一号館美術館（東京・丸の内） 2016.10.19～2017.01.09



「梅原龍三郎」（1888～1986）は、日本洋画界を牽引した画伯で、豪快な性格から『画壇のライオン』と呼ばれている。彼は油彩画が日本に定着した1908（明治41）年の20歳時にフランスに留学し、アカデミー・ジュリアンで学んで、翌年に巨匠「ルノアール」の指導を受けた。そして、師との対話から制作の様子を間近に接し、制作旅行にも同行するなどして非常に親密な関係を築いた画家である。

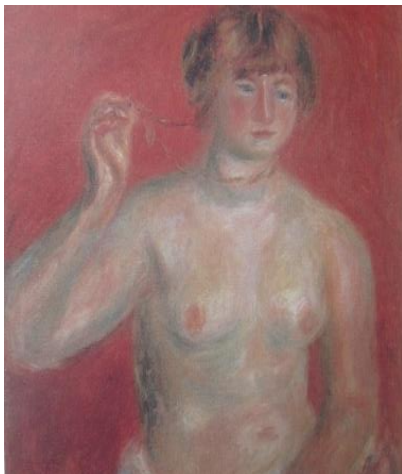
本展は、「ルノアール」と「梅原」の作品だけでなく、「梅原」が蒐集した作品に親交のあった「ピカソ」や「ルオー」らの「約80点」の名作品により、近代絵画における東西の交流を紹介している。

ルノアール	《パリの審判》（上）	1913～14	油彩・カンヴァス
梅原龍三郎	《パリの審判》（下）	1978	油彩・カンヴァス

### <本展の見どころ>

- ① 日本洋画を西洋絵画の模倣ではなく、独自の油彩画として確立した「梅原」の画集を、未公開作品を含めて日本近代化の象徴であるとして公開している。
- ② 「ルノアール」と「梅原龍三郎」の二人の代表作《パリの審判》を同時に展覧することができる貴重な機会である。
- ③ 優れた鑑識眼を持つ蒐集家「梅原」が、愛蔵した「ルノアール」「ピカソ」「ルオー」らの作品をまとめて展示している。

梅原龍三郎《黄金の首飾り》 1913年 油彩・カンヴァス



モデルは丸顔の輝くばかりの豊満な若い裸女で、一見して「ルノアール」の感化をしのばせ、背景を赤色にしたのは、“ポンペイの古代ローマの廃墟の壁の赤色が非常に美しかったため”、わざわざ赤い壁紙を購入してアトリエの壁を真っ赤にして描いた作品。

本作品制作の頃から、画伯は少しずつ「ルノアール」から離れ独自の個性を自覚し始めていたとされている。